

宇都宮清吉著

## 『漢代社会経済史研究』

時代区分についてさへ明確な画定が出来ず、究明されなければならない問題が山積している中国史の、特に古代史の分野で、独自のすぐれた見解を発表しておられることによつて、その研究の成果が多く期待をもつて注目されている学者の一人は宇都宮清吉氏であろう。本書は、その宇都宮氏が過去二十一年間にわたつて続けて来られた研究の中から、漢代社会経済史に関するものをまとめて一冊とされたものである。中国古代史の究明が、

秦漢帝國をいかにとらえるかということに一つの重要な鍵があることを考えれば、そこに鋭いメスを加えた本書の持つ重要性はまことに大きいといわなければならない。さればこそ、五井直弘氏はいち早く本書を取上げて、「歴史学研究」一八五号に、時代区分論に焦点をあわせながら書評を試みておられる。これは漢代史の最も中心的な問題を取上げたも

のであるが、私はここで再びそれをむし返そうとは思わない。というのは、本書がただ重要である、問題があるというだけのものではなく、これまで積み重ねられた著者の研鑽の成果として描き出される秦漢時代が、氏の言葉で借りるならば、一つの「時代格」をもつものとして浮彫されており、それを紹介するのが私の任務であると思うからである。

さて、本書は十二章にわかれ、夫々の章は独立した論文として以前に発表されたものを訂正、或は改稿されたものであるが、各章は全体として有機的に配列されている。第一章「東洋中世史の領域」は東洋中世史の領域設定ということを主眼として東洋史の時代区分を論じたもの。ここには東洋史全般に対しての見解がのべられ、いわば以下の各章への序説ともみることが出来るであろう。著者は東洋史について、内藤虎次郎氏の「中国文化發展の歴史」という定義を、社会経済の發展と、そこへはたらかける文化作用をふくめての中国文化という条件をつけて承認する。したがつてこの中国文化は、支配階級と被支配階級との長い闘争を経て作り出されたものであるということをお忘れはならないとい

う。このような前提のもとに、内藤的時代区分の批判を通して著者の見解を展開するが、古代史だけについていえば、上古以来發展しつつ完結しつつ展開して来た中国文化は、秦漢時代に至つて一大完結の時期に会した。それは中国古代帝國の完成期であり、この古代帝國は礼教的かつ法術的政治として完成する。それ故、秦漢時代は政治性の發展とその完結の相において捉えうるが、これはそのまま、自律性の支配する六朝時代へと転化するのであるというのである。このような氏の時代区分のたて方、及び秦漢帝國を古代帝國の完成期とみることにについて、これまで種々論議がなされて来たことは周知の所であるから、ここに改めてそれをのべる必要はないであろう。

第二章「古代帝國史概論」は第一章に示された「礼教的かつ法術的政治」として完成する秦漢帝國の成立と解体から、その社会構成を概括的にのべたものであつて、著者の研究成果はここに集約的に示されておるといえる。特にこのような概論が、ややもすれば、表面的な政治史か社会構成史に偏してしまふ危険があるのに対して、これは鋭い洞察

を含みながら、社会経済史と精神史とが政治的發展の中に統一的に把握されて見事に展開され、まことに異色の概論となつてゐる。以下にその要点の素描を敢えて試みるならば、古代帝國はそれを完成させる方向に發展していったものと、解体させる方向に發展していったものがあつた。古代帝國を完成させるものは古代氏族制に基礎をおく邑制國家の解体過程において成長をとげた君主権と官僚制であり、その基盤となつたものは自主的自立的な一般農工商民であつて、これらは強大な帝權の地盤として強固に組織され、秦帝國に統一される。従つて秦帝國は、邑制時代の遺制を清算し、デスポティズムを完成させる使命を有し、唯一絶対の帝權から一方的に人民の中に貫通してゆく法家的な法による統治が行なわれなければならないかつた。だがこれは、一方で民衆の生活を耐え難い苦しみに陥れた。その民衆の声は、鄉村におけるもつとも普通な民衆の家族生活がその具体的な場とされてゐる哲学である儒学の徒によつて代表され、漢はこの声をも理解しなければならなかつた。かくて秦帝國のあとをうけた漢帝國は

「儒家的・礼教的であると共に、法家的・法術的でもある政治」が行なわれる時期であつた。ところが、古代帝國の歴史的進行過程において、帝國成立の基盤であつた新社会層、中にも自由農民層の間には、次第に社会的、経済的分化が生じて来て、大土地所有者と一寸の土地をも持たない貧農層との対比がはつきりして来る。大土地所有者は地方の豪族階級として發展し、貧農層は豪族の勢力下に入つて下戸となるか、奴隸となるかした。即ち上家下戸制の發展である。これは帝國地盤の解体を意味し、特にこの發展の中で現われた豪族は古代帝國を解体させる使命を荷つて活躍したのである。この形勢が後漢に持ちこまれると、豪族はもはや劉氏政權によつて自由に支配される存在ではなく、さりとて独自に社会の秩序を維持して自己の發展を可能にする力量もなかつた。だから劉氏による絶対的帝權の形式を必要とし、このような形式のもとに後漢帝國の繁榮はもたらされるが、これこそ礼教的法術的政治の完成であつた。しかしこの完成がその極に達したとき、社会の矛盾はつみ重なり、遂には豪族と農民層の間から、夫々の立場で反帝國運動が開始され、この巨大な革命運動の中で帝國は瓦解する。

このような極めて複雑な素描では、この草の全容を伝えるに決して十分でないが、著者みずからも、西嶋定生氏を主動とする古代帝國論に対応しつつ、或る意味ではその反論のつもりで書いたのとておられるように、極めて意欲的であり、又そのまとまつた見解を知るに最適なものであらう。そこで少しばかりの感想を記すならば、まず、漢帝國の成立とその権力構造について、西嶋氏が、劉邦集團が家内奴隸と擬制家族を家父長権によつて強く結びつけた豪族の構造を持つものとし、そこから帝國の権力構造を明らかにしようとしたのを否定し、劉邦集團の結合は任俠的結合であるとして、そこから漢帝國の成立を論じておる点である。勿論西嶋氏の説に疑問の点はあるが、著者のいう任俠的結合といふことから、劉邦集團の結合様式は明らかにしても、究極において、漢帝國の権力構造は明らかにされておらないのではなからうか。これは、劉邦が法家的法による政治に対する民衆の反抗を歴史的至上命令として理解したことは、確かに彼の政治的偉大性であらうが、ただそれだけのものとしてしまつていいものであらうかといふことから考へてみる必要が

あると思う。強大な帝権によつて一方的に支配される民衆の耐え難い苦しみが、秦帝国を崩壊させた原動力であるとすれば、劉邦の成功もこれを除外しては考えられないであろう。したがつて、劉邦が成功した歴史的条件としての民衆、特に自由農民層の動きを具体的に解明することが、漢帝国の成立を論じる場合に極めて重要な要素となると思う。任侠的集団が帝権の座についていたとき、パトリアルカールなものを止揚してパトリモニアルな支配に変貌するその契機が、このような民衆との関連において検討されないならば、「儒家的、礼教的であると共に法家的、法術的政治」の成立も漠然たるものとしてしか理解出来ないのであるか。

このようなことは他の点についてもいえると思う。たとへば、「漢帝国の基礎たる民を社会的、経済的に解体し、一方では官僚系統を変質せしめ、やがて帝権そのものの在り方をさえ変化させる」豪族の發展は、経済的圧迫をうけて土地を失つた自由農民を、下戸や奴隸としてこそ可能なのであるが、それは本書の「僱約研究」でのべられているように、「農民は好んで小作化した」からであると言い

切れるものであろうか。それならば、王莽が倒れた後の後漢帝国は、豪族の發展が独自の政治を組織するまでに至つていないから劉氏の帝権を必要としたというのは何故なのであろう。著者によれば、豪族は帝国を崩壊させるものとして捉えられている。それがたとへ豪族の連合という形であつたとしても、帝権によらなければ社会の秩序を維持し、自己の發展を可能にし得なかつたということは、豪族勢力の伸長を阻止する力が帝権だけでない、他にもあつたものと考えなければならぬであろう。換言すれば、後漢帝国が豪族連合政權としてしか成立し得なかつたのは何故かということなのである。これは又、礼教的、法術的政治が完成の極に達した時、訴えようもない民衆の苦悶、社会の矛盾がみちあふれていたというその内容や性質がどういふものであつたか、さらに、赤眉や黄巾にみられるエネルギーがどこから出て来るかという疑問につらなつてくる。これらの疑問が十分に解明されるためには、豪族というものが、単に豪族として取上げられるのではなく、自由農民との関連において、さらに検討される必要があるのではなからうか。

以上の第一章、第二章が古代帝国としての秦漢帝国の概論として、本書の前篇を構成するとすれば、第三章以下は後篇として、前篇にあらわれた見解を支える詳細な個別研究と考えられよう。これらの論文は、以前に發表されて夫々多くの影響と問題を投げたものであるから、極く簡単な紹介だけにとどめよう。

第三章から第五章までは「西漢時代の都市」「西漢の首都長安」「史記貨殖列伝研究」であつて、古代中国における流通経済の發展と、その中心的存在としての都市、更に経済的世界の理法を研究したものである。ここでは著者独特の精密な分析と方法によつて、中国を中心として経済的世界と、そこに活躍する商人の実体が明らかにされている。又これを通して古代帝国の成立とその変質の面までが論じられている点、卓越した研究に敬服するばかりである。ただ少しばかりの欲をいうならば、経済世界の巨大な姿が明らかにされたことは重要なことであるが、より大事なものは、流通経済の發展が、農業を基礎とする当時の社会にあつて、どれ程の影響を持つていたかということではないだろうか。流通経済

の發展もただそれだけでなく、全般的な生産関係の中で考えられなければならないとおもう。これに続く第六章、第七章は、夫々「統漢志百官受奉例考」「統漢志百官受奉例考再論」で、統漢志の百官受奉例の文字を校正しながら、それが錢と穀七対三の割合であったことを明らかにしたものの。当時の貨幣使用の一面面を知ることが出来る。

第八章、第九章は「漢代蒼頭考」「僮約研究」で、漢代の直接生産者としての奴隸を研究されたものである。特に第九章では「僮約」の考勘からはじまつて、漢代の生産の主力は奴隸であつたのではなく、上家下戸制という小作制にあつたこと、従つて漢代の社会構造を決定したものは上家下戸の結合関係であり、奴隸はこのような社会の副産物にすぎないことを論じられたものである。そして更に、下戸階級の増大と、地主勢力の土地所有の發展は自給自足的な荘園経済をもたらし、古代帝国としての秦漢帝国を崩壊せしめるのであるという。ここに論じられていること

評  
そ、著者の古代帝国論の骨格をなすとみるべきもので、本書中における最も中心的な論文書といえると思うが、又それだけに時代区分論

ともからみあつて多くの論議がある所でもあらう。前記五井氏もこれを論じておられるし、又私の荷にあまる問題でもあるので、ここで深入りすることは避けたいと思うが、要は上家下戸制の具体的な在り方、特に下戸層の具体的な分析を通してこそ、これを小作制とみるか半奴隸的なものとみるかが明らかにするのであつて、ここに今後の問題が残されているといえよう。この点について著者がより一層明らかにして下さることを期待したい。

第十章、第十一章は豪族研究としての「劉秀と南陽」「漢代における家と豪族」である。前者は後漢帝国の創始者劉秀の直接の地盤となつた南陽豪族社会を説明するとともに、南陽の経済的發展を研究されたもの。後者は漢代の社式的最小単位であつた家の詳細な研究と、豪族の多角的な研究である。これらの章では、古代帝国を切り崩すものとしての豪族の実体が、社会的性格や機能とからみあつて、描き出されている。ただ豪族が古代帝国を崩壊させるものであることを一層明確にするためには、前にもふれたように、その下に下戸層として組み入れられてゆく自由農民と

の関連においてとらえてゆかなければならぬのではないだろうか。

最後の第十二章「世説新語の時代」は後漢末から西晉という中国史上の一つのエポックに生活した人々の生活態度を通して、古代帝国の政治性に対する自律性の支配する時代の姿をとらえようとしたもので、内容においても本書の完結をなしているものである。

以上甚が蕪雑な紹介で、果して本書の全貌と著者の意図するところを十全に伝え得たかどうか甚だ疑問である。又、批評というにはあまりに素朴な感想も當を失したものであるかも知れない。若しそうだとすれば、ひとえに私の浅学の故なのであつて、著者の許しと教示を願いたい。しかし、著者二十年來の研究の成果は、どれ一つをみてもまことに貴重なるものであつて、それがかかる形で上梓されたということだけでも、研究者に益するところはかり知れないものがあることは断言出来ると思う。

—— 杉村 壯 三 ——

(A5版五二五頁 一三〇〇円 弘文堂)